行財政改革・グローバル戦略特別委員会
会議記録

行財政改革・グローバル戦略特別委員長　　志村　学

１　日　時

平成２７年１２月１５日（火）　午前１０時００分から
午後　０時１５分まで

２　場　所

第３委員会室及び第４委員会室

３　出席した委員の氏名

志村学、戸高賢史、衛藤博昭、大友栄二、末宗秀雄、麻生栄作、守永信幸、
藤田正道、小嶋秀行、桑原宏史

４　欠席した委員の氏名

な　し

５　出席した委員外議員の氏名

吉冨英三郎、井上明夫、木付親次、古手川正治、井上伸史、田中利明、木田昇、
三浦正臣、平岩純子、久原和弘、吉岡美智子、森誠一

６　出席した執行部関係の職・氏名

企画振興部長　廣瀬祐宏、商工労働部長　西山英将　ほか関係者

７　会議に付した事件の件名

別紙次第のとおり

８　出席した参考人の氏名

台北駐福岡経済文化弁事処　処長　戎義俊

９　会議の概要及び結果

（１）グローバル戦略について調査した。
（２）グローバル戦略について参考人から意見聴取した。
（３）県外所管事務調査を平成２８年２月１８日～２０日に実施することを決定した。
（４）報告書骨子（案）について協議した。

１０　その他必要な事項

な　し

１１　担当書記

政策調査課政策法務班　副主幹　礒﨑香織
政策調査課調査広報班　副主幹　三重野大
議事課議事調整班　　主幹　　若狭日出子

行財政改革・グローバル戦略特別委員会次第

日時：平成２７年１２月１５日（火）１０：００～
場所：第４委員会室、第３委員会室

１　開　　会

２　付託案件の調査　　１０：００～１２：００
（１）グローバル戦略について
（２）戎台北駐福岡経済文化弁事処長講演

３　協議事項　　１２：００～１２：２０
（１）県外所管事務調査について
（２）報告書骨子（案）について

４　そ の 他

５　閉　　会

別　紙

会議の概要及び結果

志村委員長　おはようございます。ただいまから行財政改革・グローバル戦略特別委員会を開きます。

本日は、付託案件のグローバル戦略について、特に企画振興部関係、商工労働部関係の審議を行いたいと思います。

これより企画振興部の調査に入ります。

お手元の次第の３項目につきまして、説明をお願いしたいと思います。

廣瀬企画振興部長　おはようございます。海外戦略につきましては、本年１０月に改定いたしまして、策定いたしました。

その中で分野別ターゲットとする国とか地域を定めまして、特に台湾は今後の重要な地域の１つということで位置づけております。台湾につきましては、観光客のほうが年々ふえておりまして、直近の１１月のデータでは、韓国に次いで２番目に多いんですけれども、割合的には、韓国６割だったのが、今、韓国が５割ぐらいになって、台湾が今２割ぐらいのウエートを占めるようになっています。それから、中国圏が１割みたいな、そういう台湾からの観光客が非常にふえております。

また、日田梨、あるいは乾シイタケといった県産品の輸出の促進でありますとか、ものづくり産業の分野においても、工業界、半導体産業を中心として、あるいは金属加工などの工業界の取引、海外展開支援というふうなこともやられております。

それから、チャーター便が１０月、１１月と、マンダリン航空チャーター便が飛びまして、そのチャーター便につきましては、定期路線化に向けての誘致というのを積極的に今行っているところであります。

先月には、台湾において初めて観光、それから県産品、あるいはものづくり産業といった、一体となったプロモーションを実施いたしました。太田副知事をトップに１０５名のミッションで訪問いたしまして、各分野におけるＰＲ、あるいは商談会、交流会を行ったところであります。

そして、台北市でプロモーションを行ったんですけれども、台中市とは、観光友好交流協定ということで協定書を締結いたしまして、これはマンダリン航空の台中空港という拠点のハブ空港があるということもありまして、しかも、台湾で非常に大きな台北、高雄、それから、台中市という人口２７０万人という大きな都市でもありますので、そこと交流拠点の締結をしたところであります。

詳細につきましては、ただいまから担当課長よりご説明させていただきます。よろしくお願いします。

堀国際政策課長　こちらの特別委員会説明資料に基づいて説明したいと思います。

１ページ目をお願いいたします。

訪日教育旅行の誘致について、まずご説明申し上げます。

左側中ほどの受け入れ実績をごらんください。受け入れ人数全体では、平成２２年度には２，１１８人でしたけれども、２３年度の東日本大震災の影響のときは５０３人で、そ

の後、回復はしてきておりますけれども、２６年度は１，６３９人となっております。

最近、受け入れ人数がふえていない理由としましては、尖閣諸島をめぐる関係の悪化、それから、韓国旅客船の沈没事故などが影響して、中国、それから韓国からの訪日教育旅行が思うように増加していないことが挙げられております。

それで、台湾からの受け入れの欄を見ていただくと、年によって出入りがありますけれども、２５年度は４団体１１４人、２６年度は２団体の５３人となっております。ちなみに、今年度のこれまでは３団体の９６人が台湾から来ております。

その左下、平成２５年度の受け入れ実績、全国、九州と比べた数ですけれども、全体では４万４，５０３人の受け入れのうち、台湾からは１万２，９４５人と、国、地域別では最も多い国となっております。でも、この台湾からは東京、大阪、京都ルートが、ほとんどを占めているのが実態でございます。

国も、今後２０２０年に、５割増の６万人受け入れを目指して、訪日教育旅行の誘致には積極的に取り組んでいくこととしております。

資料右側の県の取り組みですけれども、受け入れ体制の強化と誘致活動を展開しております。

受け入れ体制の強化では、学校現場を理解した専門のコーディネーター１名を配置しまして、関係課や市町村と連携しながら、学校交流のマッチングなど、円滑な受け入れを行っております。

また、２番の誘致活動の展開におきましては、日本政府観光局（ＪＮＴＯ）が国内、国外で開催しますセミナー、または県が行う観光商談会などで積極的に誘致活動を行っております。やっぱり受け入れ実績が多い韓国、中国、それから、台湾、タイなどを主なターゲットとしておりまして、各国、地域の特性に合わせた学校交流プログラムやグリーンツーリズム（農泊）や観光の体験コースなどを現地の旅行者、もしくは学校関係者に提言を行ったりしております。

特に台湾からの誘致ということで、台湾は特に政治情勢の影響を受けにくいこともありまして、また、台湾から海外へ行く教育旅行としましては、日本へ行く学校のシェアは約９割と言われております。そういうことで、今後も増加していくことが期待できますため、あらゆる機会を捉えて積極的に取り組んでいきたいと考えております。

なお、台湾からの教育旅行の実績一覧、それから、県内高校の海外修学旅行の一覧は別添資料のほうに添付しております。

続きまして、資料２ページの台湾プロモーションについて説明させていただきます。

先ほど、部長からも簡単にありましたけれども、１１月２６日から２８日まで、観光と県産品のプロモーション、それから、ものづくり産業の企業交流のために太田副知事を団長としまして、観光、商工、農林水産、行政、メディア、総勢１０５名のミッションにより訪問いたしました。マンダリン航空の韓社長、それから、三三企業交流会の江会長等を訪問し、意見交換を行いました。

２７日の夜にレセプションであります大分県の夕べを開催しまして、招待者は観光分野、それから、貿易、流通、ものづくり、メディア、県人会など、予想を超えまして１９７名に来ていただきまして、大盛況でした。

会場は、かぼすブリ、かぼすヒラメの寿司や刺身、それから、乾シイタケを使った鉄板

焼き、それから、日田梨、甘太くんなどをご賞味いただき、どれも非常に好評でした。

さらに、台湾の地元テレビ局、雑誌社にも多くメディアが取材に積極的でして、翌日には、台湾全土でニュース報道もされたところです。

観光商談会につきましては、台北市では、台北の観光業者５８社、台中では４４社が参加して、それから、ものづくり企業関係では、台湾側企業４７社のうち、ものづくり企業が４０社、酒造企業７社が参加されまして、活発な商談を行うことができました。

今回のプロモーションでは、台湾の多くの関係者に観光県産品の魅力について強くアピールできましたので、今後につなげていきたいと思っております。

細川観光・地域振興課長　それでは、台中市との観光友好交流連携協定についてご説明いたします。資料の３ページです。

まず、協定締結の経緯でございます。台中市には、台湾でも有名な温泉とサイクリングロードが存在するなど、本県と非常に共通する観光資源を有していることから、本年５月に台中市政府観光旅遊局から本県と台中市内の温泉振興、観光振興を目的とした交流の申し出があったのが始まりでございます。

その後、８月に台中市政府関係者及び観光関係者などが来県いたしまして、今回の協定の前提となった観光友好交流連携に関する覚書を交わすとともに県内温泉地の視察、それから、観光関係者との意見交換などを実施いたしました。

さらに１０月には、本県の観光関係者とともに、台中市を訪問いたしまして、温泉地及び観光施設の視察に合わせまして、日本の温泉マナーや浴衣の着つけの講座などを行うとともに、日本一のおんせん県おおいたの官民一体となった観光の取り組みについて、ご紹介し、意見を交わすなど、交流を進めてまいりました。

協定締結による台中市との強い絆をつくることは、単に観光交流の進展のみならず、台中からの国際航空便の定期就航や、それによる同地域からの観光客の増加など、本県観光振興に資するものと判断し、先月２７日に企画振興部長が台中市を訪問した際、協定締結を行ったところでございます。

協定の内容についてですが、観光情報の共有や送客の促進、事業や交流イベントへの積極的な参加、観光ウエブサイト等での相互の観光宣伝など、大分県及び台中市の観光産業の一層の発展に向けて、相互理解と親善を深め、観光推進において協力し合うことを基本としております。

今後の取り組みにつきましてですが、観光ウエブサイトにおいて、互いの観光情報を発信することや、来年５月に台中市旅行商業同業公会が主催する台中国際旅行展覧会がございます。これに大分県ブースを出展し、台中市の消費者に向けたＰＲを実施する予定でございます。

以上でございます。

土田交通政策課長　資料の４ページをごらんください。

台湾チャーター便の誘致について、ご説明申し上げます。

現在、海外からの訪日旅行客につきましては、非常に伸びてございます。ことしの訪日外国人旅行者数は、１０月までに１，６３１万人と、年間累計で過去最高を更新しております。冒頭、部長からもございましたが、大分県内の比率におきましても、かなりふえている状況でございます。

これに対応しまして、この増加しているインバウンド需要の県内の取り組みをいかに図っていくかという観点が必要だというふうに考えてございます。

こうした中、大分空港の国際定期便は、ご案内のとおり、ソウル便のみ運行されている状態でございますので、この伸びているインバウンド需要を取り込むために、県の海外戦略におきまして、海外誘客に取り組むターゲット国として位置づけている中国、香港、台湾、タイなどを中心に、新たな国際定期便の就航に向けて、積極的な誘致に取り組んでいるところでございます。

この中で、特に台湾につきましては、親日的で安定的な誘客が見込めることから、最も重要な地域として考えてございまして、特に積極的に航空会社を訪問してございます。

台湾には、３つの大きな会社と、２つのＬＣＣがございます。チャイナエアラインとエバー航空とトランスアジア航空（復興航空）、こういう３つの大手と、Ｖエアーという会社とタイガーエア台湾というＬＣＣが２つございますが、これら５つの航空会社には全て営業活動に行ってまいりました。

その中で、本県の観光素材、チャーター便運行の支援内容を説明するなど、誘致活動、営業活動に努めてまいりました。

その活動の中で、チャイナエアラインの１００％子会社でありますマンダリン航空さんのほうから、そのチャーター便の運航に前向きな姿勢が見られたことから、特に積極的にアプローチを行ってまいりました。

一方で、台湾には三大都市圏ということで、台北、高雄、台中というのがございますけれども、このうち、台北と高雄につきましては、資料にもございますように、九州の他県への定期便が既に就航してございます。また、桃園国際空港につきましては、非常に混雑しておりまして、新しいスロットを割り当てるというのは非常に難しい状況というのもございました。こういうわけで、まだ他県が進出していない三大都市圏のうちの台中に焦点を絞りまして、特にアプローチを行った結果、ご案内いたしましたとおり、チャーター便運航が決定したものでございます。

そのチャーター便でございますが、１０月から１１月の間の約２カ月間、計１４往復ということでございます。この１４往復は、台中空港と大分県、長崎県の両空港との間で、３地点間チャーターという形で行われたものでありまして、このうち、大分空港には７往復分運航されまして、利用率といたしましては、約８割と好調であったと考えてございます。

先日の台湾プロモーションに行った際にも、マンダリン航空の社長さんの韓さんを表敬訪問いたしました。その際にも、社長のほうから直接、大分への運航は大成功だったという発言を頂戴したところでございます。

その際、あわせて社長のほうからは、大分のきれいな景色が、旅行者にとっては大変好評でありまして、チャーター便を利用した人が口コミで大分の宣伝をしてくれるということを通じて、知名度も非常に高まっているということもあわせて言ってございまして、今回、秋に運航いたしましたので、ほかの季節、春とか夏においてもチャーター便を運航して、１年を通じて運航状況を確認したいということで、前向きな発言を頂戴したところでございます。

今後、県といたしましては、なるべく早期に定期便の運航につなげたいということを考

えておりますので、春夏といった違う季節でチャーター便の運航を働きかけて、定期便の運航にぜひつなげていきたいというふうに考えてございます。

以上でございます。

志村委員長　はい、ありがとうございました。

以上で、執行部の説明が終わりました。３点合わせまして質疑あるいは議論をしたいと思います。どうぞそれぞれご意見をお願いいたします。

藤田委員　冒頭の訪日旅行の誘致の一覧表の中に、国別内訳でその他で４５０人というのがあるんですけれども、こちらでどこか特徴的な国とか地域がありますか。

堀国際政策課長　東南アジアのほうが観光客がふえているのに比例しているんですけれども、例えば、この中でタイが実はここ２年で伸びていまして、平成２６年の実績では９０数名とか、あとインドネシア、マレーシアからとか、あとは意外とオーストラリアとかアメリカとか、そういうところが――全国的には、先ほど言いますような台湾が今トップなんですけれども、その次は韓国、アメリカ、オーストラリア、中国と、そういう順番になっておりまして、東南アジアが九州の特徴という形になっております。

麻生委員　ちょっと何点かありますが、まず、訪日旅行の誘致に関してですが、受け入れ学校とか、農家民泊とか、そういったところの将来へのリピーターとしてつくるためには、クリスマスカードのやり取りだとか、エアメールのやり取りだとか、住所とか、そういったものをしっかりと学校、あるいは農家民泊等々でも把握しておく必要があると思うんだけれども、なかなかその辺が言葉の壁かどうか知らないけれども、指導が行き届いていないですよね。その辺をしっかりとやっぱり体制強化という部分ではやっていかないといけないと思うんですが、その辺についての考え方、どうしようとされていらっしゃるのか、１点。

それから、台湾に限って焦点を絞って言うなら、例えば、台湾の土地改良事業に尽力した宇佐市出身の中島力男氏、蓬莱米の母と言われる現在の大分県三重総合高等学校卒業生の末永仁氏、そういった大分独自の特別な関係があるにもかかわらず、今の説明を聞く中では、そういった大分独自の特徴というのが、他県との比較といった部分が出てきていないので、その辺についての考え方をお知らせください。

それから、台湾プロモーションに力を入れているということなんだけれども、先日も県立美術館に台湾からのロータリークラブの関係の方をお迎えしたけれども、繁体字のパンフレットがなかったんですよね。ということは、大分県の観光パンフレット、台湾に力を入れるということは、そういった中国語パンフレットはあっても、台湾の人は、繁体字じゃないと読めないわけでしょう。全体的にその辺は現状、どうなっているのか、それについて伺います。

それから、このおおいた国際交流団体ハンドブック、これを見ると、例えば、ロータリークラブとかライオンズクラブとか、青年会議所だとか、毎年行き来しているような団体についての記載があったとしても、代表者もかわっていれば、どこと交流しているか、姉妹クラブとか、そういったのがあるんだけど、一切記載ないですよね。

ここに載っている関係のところというのは、そういった個対個の国際的な組織の交流の中で、同じ目的等々で物すごく深い関係交流をやっているようなところから始まって、こういう団体には所属していると。それがきっかけになって、むしろ、所属させられている

と、そういうふうになっているんだけれども、原点の部分がもう全て抜け落ちている。福岡県のパンフレットと比較したことはありますか、これは。ちょっとよく調べて、そういったものを比較していただいて、そして、例えば、青年会議所は１月１日から１２月３１日までとか、いろんな年次も違うわけですよね。そういったことを含めて、認識して準備していく必要があろうかと思いますね。その件について。

それから、最後に、例えば、サッカーで言うと、今、トリニータが問題になっていますけれども、どこからどういう選手を引っ張ってくるか、こういったことも含めて、Ｊリーグには国際戦略というのがあるんですよね。これは分厚い、プリントアウトすると３００ページぐらいのやつが出てきますけれども、そういった国際戦略、スポーツツーリズムということも言い始めているわけですけれども、そういう意味でのプロスポーツ関係の国際戦略をうまく活用しながら、大分県の戦略をつくっていきながら、スポーツツーリズムにもつなげていくという発想についての取り組みというのは、どこかに戦略的に出てきているんでしょうか。

以上伺います。

堀国際政策課長　最初の、来られた生徒さんたちとの今後のフォローアップという形だと思うんですけれども、実際、教育活動のほうでも先生方と非常にうまく話せば、実際に生徒同士でメールのやり取りをするというのが今、簡単にできますので、英語ベース等で結構やられているところがふえておりますし、私どもも、コーディネーターの方とか、説明するときに、せっかく１回限りの交流ではなくて、今後につなげるようにという形で知っているところがふえていると思っておりますけれども、確かに今後につなげるためにも、夏は生徒同士の交流、それから、大分とつながってもらうという形で、何とかまた進めていきたいとは思っております。

それから、２番目の大分の特徴の売り込みなんですけれども、なかなか思うようにはできていないかもしれないんですけれども、例えば、今回できたＯＰＡＭの話とか、その歴史的な由来とかは、事あるごとに資料には入れてやっていきたいと思っております。まだ不十分なところは確かにあると思っております。

それから、ハンドブックにつきましては、確かに芸術文化スポーツ財団の国際交流プラザのほうで作成して、刷新するのは２年に１回で、今一番古い時期でして、ちょうど今２年目になるので、来年早々に改訂しますので、その中身につきましては、ちょっと研究させてもらって、ほかの一般の方が使いやすいように情報をどこまで出すかというのはありますけれども、活用させていただきたいというふうに思っております。

志村委員長　パンフレットの例の繁体字については。

細川観光・地域振興課長　３点ほどあったので少しずつ。

１つは、農泊でございますけれども、農泊のほう、今回、台湾プロモーションに当たっては、台湾に行って、かなり事業者のほうにお願いをいたしまして、農泊に海外の観光客７００人という報道がありましたように、台湾のほうから企業のほうですけれども、インセンティブ旅行でおいでいただく、あるいはまさにおいでいただいているところであります。こういうつながりを交流にしっかりつなげていきたいと思います。

それから、土地改良等の中島力男さんについて、意見交換の中で私もお伺いしましたら、八田さんのほうは非常に有名で、交流がずっと続いているそうなんですけれども、中島さ

んのほう、やはり現地で亡くなっていないので、少しネームバリューが薄いかなという感じがいたしました。しかし、これは交流の中で、少しずつ訴えかけていきたいと思います。ちょっと台中とは違う、むしろ、高雄に近い南のほうなので、このところは１つあったかなというふうに思います。

もう１人の蓬莱米を開発された末永さんですね、これももう１人すごい人がおられまして、そちらの方のほうが有名でございました。ただ、末永さんがそういうかかわりを持ったということは、非常に関心を持って受けとめていただきました。ちょうど花博の会場で、農業関係の方とお話ししましたときに、ああ、そうなんですかと関心を持っていただきましたので、これもしっかりお話をしていけば、また、通じるところがあるんではないかというふうに感じました。

それから、繁体字のパンフレットですが、これは観光のほうはしっかりつくらせていただいておりますので、今回のご商談会でもしっかりＰＲをしております。

さらにことし、これをちょっと１年、半年、現地のエージェント等と話す中で、改良する点が見つかりましたので、しっかりこれをつくり直して、来年に向けて、交流も含めて、使うようにリニューアルをさせていただきたいと考えております。

以上でございます。

麻生委員　農家民泊に関して、やっぱり農家の方々なんで、今後の交流につながるようなやつを市町村とも連携を図って、ツールを何かつくってあげるといいかなと、こんなお子さんが集まったとか、将来、そこにやり取りできるような最低限、情報を何か書いていってもらうとか。そうすれば、必ずリピートにつながると思います。

２点目の大分県の独自性という部分があって、相手国によって、興味、関心も違うでしょうから、その辺、うまく大分の、どこにその国の文化、習慣からすれば、興味関心が示されるか、そういったものをうまくパンフレット等々も国ごと、文字も含めて考えていただければと。

繁体字についても、見直しをされるということですから、大分の独自性という意味では、さっき言った蓬莱米とか土地改良とか、そういった方々のものも、ちょっと載っていると、ああ、そうなんだと。国の歴史に伝わるような部分も載っている、ああ、大分なんだねということになればいいなと思いますので、その辺、ぜひ工夫して取り組んでいただければと思います。

以上です。

末宗委員　最初に、外国人旅行者１０月までで１，６３１万人とあるんだけれども、これはどういうデータですか。仕事、ビジネスは関係ないデータでとれているのかな、まず１点。

土田交通政策課長　日本政府観光局のＪＮＴＯが取りまとめて観光庁が公表しているデータでございまして、日本に入ってきている旅行者ですので、ビジネスも含んでいる数字でございます。

末宗委員　この前、別府で観光の話を聞いたんだけど、そのときに２０２０年、ことしぐらいで２千万人行くような勢いなんだけど、大体２０２０年か、そこらあたりで、５，６００万人ぐらいをめどにしたほうがいいんじゃないかと、そういう講演があったんだけど。

その中で、大分県の場合、特に問題なのが、別府とかでホテルがないとか、そういう問

題をはらんでいるんだけど、特に観光振興を図る場合は、東南アジアがもちろん８割方あるんだろうけど、アメリカとかヨーロッパの旅行者、それでまた、期間も長いし、投資効果も大きいわけやけど、そこあたりが日本のこういう政策が余りないというんやね。例えば、フランスやったら８，３００万人ぐらいの旅行者があるというわけ。そこあたりについて戦略をどういうふうに大分県は練っているのかなと思って。

細川観光・地域振興課長　まず、旅館、ホテル等だと思うんですが、旅館、ホテルにつきましては、量というより、まだ受け入れをしっかりやろうという体制が、まだまだだなというふうに思っております。やはり、少し障壁があるので、そこを解消してあげないと、どうしても一部しか受け入れないというふうなことになっておりますので、そこをまず１つきちんとそんなに難しい問題ではないんだというところをやっていかなきゃいけない。

農泊も同じで、最初は受け入れていなかったところが、（「いやいや、ホテルがないと言いよんのや、泊まるところがないと言いよる」と言う者あり）そこを拡大していく。受け入れの側の障壁を除いてあげて、少し量をふやしていく、受け入れの量をふやしていくところが１つ必要であろうと思います。

あとは、最近、中津とか佐伯、日田あたりにビジネスホテルも進出してきております。こういうビジネス系のホテルの誘導ということも考えられると思っておりますし、その先には、ちょっとリニューアルを、旅館自体の努力、これは経済界の支援も必要なんですけれども、そういうリニューアルを働きかける方法、こういう３点を考えつつ、推進していく必要があるというふうに考えております。

志村委員長　よろしいですか。

末宗委員　いえいえ全体的なことを聞いたので。

廣瀬企画振興部長　欧米系の皆様の誘客については、ラグビーワールドカップ、オリンピックがありますので、当然、県として、アジアに軸足を置きながら、欧米系向けの誘客を図っていくということを本格的に今年度、来年度から取り組んでいくということにしております。

それは２つありまして、１つは、欧米向けに大分県というのをしっかり情報発信しないといけないので、まずはそれに取り組む。

それから、もう１つは、受け入れ環境を整えるということで、今、委員おっしゃったように、旅館、ホテルが欧米向け仕様じゃないと、なかなか、聞くところによると、日本文化を経験するために１泊は旅館に泊まるけれども、連泊するとなると、もうちょっと快適じゃないと欧米の人は泊まらないというふうなご意見もいただいていますので、そこのところをどうやるかというのは、今１つ課題になっています。

旅館というのが老朽化していますので、リニューアルに合わせて一部欧米向けの部屋をつくるであるとか、そんなことも取り組まないといけないというふうに思っていますので、今、いろいろ研究、検討しているところであります。

末宗委員　いや、今、外国人観光客がふえるとかいろいろ言いよるけど、それはほたっとっても、もう３千万人ぐらいすぐ行くよ、ビジネスまで入っていると言うんだから。

大分県は何もしなくても、もうすぐふえると思うよ、統計上は。現実にふえるのは、観光政策というのは、その中身で、観光の振興ができるかどうかで、外国人がふえたけん、さあ観光産業がふえたという、そのビジネスまで全部入っているというんだから、本質は

違うと思うんよ。そこあたりを踏まえて、よろしく。

阿部観光・地域局長　国の場合、２千万人はもう確実、３千万人にふやそうということで。

ただ、（「いや、ほたっちょってもいくやん」と言う者あり）ご案内のとおり、中心が、やはりゴールデンルート、東京、大阪、京都、そこにまだまだ集中しています。大分の場合には、今、観光だけで見ますと、対前年比で六十数％伸びてきております。そういった観光客のニーズにしっかり対応する受け皿として、委員がおっしゃるとおり、旅館、ホテルがしっかりインバウンドに対応できるように、それから、Ｗｉ－Ｆｉとかガイドとか、そういったものへの受け入れ環境の整備をどんどん進めています。

今、別府だけではなく、例えば、日田あたりもかなり台湾からのお客様が相当ふえてきています。ですから、県下全域で受け入れられるようにしっかりと取り組んでまいりたいと思います。

以上です。

志村委員長　はい、わかりました。

きょうは予定がいろいろ詰まっておりますので、もうこの程度にしたいと思っております。

以上で企画振興部は終わります。ありがとうございました。どうぞご退席ください。

なお、資料として皆さん、教育旅行についての海外への資料がありますので、これはまた改めて議論したいと思います。

〔企画振興部退室、商工労働部入室〕

志村委員長　それでは、商工労働部関係の調査に入ります。

大分県と台湾の貿易につきまして、執行部の説明をお願いいたします。

西山商工労働部長　皆様には日ごろから県政諸課題に関しまして、ご指導、ご鞭撻のほど、ありがとうございます。

さて、本日は人口減少社会、グローバル化の中で、非常に大切になっております海外市場の改革についての政策等についてご説明いたします。

地理的にも近く、親日的であり、近年、経済成長を遂げている台湾との交流ということは、県産品の輸出拡大や、あるいは県内企業の販路開拓など、中国とアジア市場を見据えた海外展開を図る上でも重要だというふうに認識しております。

本日の特別委員会では、この台湾に関します取り組みについてご説明させていただきます。よろしくお願いいたします。

森山産業集積室長　半導体関連産業の海外展開についてご説明いたします。

お手元の委員会資料１ページをお開きください。

半導体関連産業は、背景にございますとおり、アジアを中心に世界市場を拡大しており、この中でも台湾は世界的な半導体製造企業を有し、世界有数の半導体集積地となっております。そこで、本県では、取り組みにありますとおり、大分県ＬＳＩクラスター建設推進会議を推進母体として、平成２３年１１月に、台湾の主要な半導体企業等で構成された台湾電子設備協会とＭＯＵ、覚書でございますけれども、を締結し、ビジネス交流を始めたところです。

ＭＯＵ締結後、平成２４年度からＪＥＴＲＯの地域間交流支援事業等を活用して、台湾での展示会への出展、個別商談会の開催などを行い、これまでに半導体製造装置や検査装置などで１２件の成約につなげております。

本年度からは、巨大市場である中国本土を視野に入れ、台湾電子設備協会と連携し、上海に立地する半導体関連企業との、取引拡大に向けたビジネス交流などに取り組んでおります。

以上でございます。

工藤工業振興課長　本県の強みであるものづくり企業の販路開拓についてご説明します。

資料の２ページをごらんください。

中小企業を取り巻く環境変化に対応し、本県の強みであるものづくり企業のさらなる成長を図るため、海外展開の機会の場を提供してまいりました。

台湾とは、これまでＭＯＵの締結や交流商談会の開催など、ビジネスマッチングに向けた環境づくりを続けてきたところです。先月実施されました大分県台湾プロモーションにおいて、大分県工業連合会として参加いたしました。

三三企業交流会の江丙坤会長への表敬訪問では、今後も両団体が継続して交流を行うことを確認いたしました。また、大分・台湾企業合同商談会が開催され、大分県からは、県工業連合会の会員１２社のものづくり企業が参加し、台湾企業４０社との商談会を行いました。その商談会の結果を、アンケート結果という形でお手元に提供しております。

その商談会では、金属加工や、機械、食品、エネルギー関係などの分野にわたり、参加した事務所全てがサンプル評価や試作品提供の依頼を受けるなど、各社それぞれ２から３の商談案件が得られており、まずまずの手応えを感じているところでございます。

幸い、台湾は、ものづくりで高い技術力を持ち、我々と同じ価値観を共有するという意味で最適なビジネスパートナーでございます。この商談会を契機に多くのビジネスが進展するよう、個々の商談内容を把握した上で、引き続きフォローアップに努めてまいりたいと考えております。

以上でございます。

武藤商業・サービス業振興課長　県産加工食品の輸出拡大について、ご説明をいたします。

資料の３ページをごらんいただきたいと思います。

台湾における日本食品の需要は、近年急速に高まりを見せており、県では平成２６年度から取り組みを進めております。

プロモーション実施状況の１番ですが、ことし３月に台北で開催した大分県産品販路拡大商談会では、８社が参加しました。大阪の商社と連携して、現地バイヤーと商談を行い、県内企業３社の調味料、麺、リキュールなど、計１９商品の成約につながっております。

３番ですが、先月行われた大分県台湾プロモーションでは、海外での人気が高まりつつある日本酒やリキュールなど、酒類に特化した商談会を行いました。県内の蔵元３社と現地の商社や小売店１３社が商談に臨み、現在も商談が継続しております。

今後は、取引の成立を目指し、各蔵元のフォローを行うとともに、大分県貿易アドバイザーなどと共同して、輸出が有望な県産品の販路拡大を推進してまいります。

以上でございます。

上野おおいたブランド推進課長　県産農林水産物の輸出状況についてご説明いたします。

資料４ページをごらんください。

昨年度の本県から台湾への輸出実績は、表にありますとおり、梨、乾シイタケ、丸太の３品目になります。このうち、特に梨について重点的に取り組みを進めているところであります。

台湾では、旧正月に当たる春節や中秋節に食品のギフトを贈る習慣がありまして、特に中秋節、ことしの場合９月２７日になりますけれども、縁起物として、丸くて大きい日田梨が好まれております。県では、平成１６年度からブランドおおいた輸出促進協議会を立ち上げ、輸出の取り組みを進めております。

表の下、プロモーション、バイヤー招聘状況をごらんください。ことしは７月に日田梨の輸入業者であります台湾の商田實業の林会長と高雄大立百貨店の黄課長を産地に招聘し、梨園等を視察していただいております。

９月の中秋節向けの梨の販売協議を行い、新規に高雄の大立百貨店での取り扱いが決まりました。９月９日からは、台北のＳＯＧＯ忠孝店やＣｉｔｙ　Ｓｕｐｅｒ復興店、高雄の大立百貨店等で販売促進活動を行いました。

また、先月２６日からの大分県台湾プロモーションでは、日田梨、甘太くん、乾シイタケ、かぼすブリ等をＰＲし、商談を行った結果、春節に向けまして、新たに甘太くんの注文も決定したところであります。

甘太くんにつきましては、初めて台湾に輸出することになりますので、２月８日の春節に向けまして、１月２９日から販売促進活動を行うよう計画しております。

その他の品目につきましては、乾シイタケは台湾のＣｉｔｙ　Ｓｕｐｅｒと取引しておりまして、春節に向けた新たなアイテムの注文を受けたところであります。

また、丸太につきましては、スポット的ではありますが、土木用資材等として輸出されております。

今後も、さらなる取引の拡大を目指して、販路開拓を進めてまいります。

以上でございます。

志村委員長　はい、ありがとうございました。

以上で説明が終わりました。ご質問を受けたいと思います。

衛藤委員　半導体関連産業での台湾への海外展開なんですけど、今、東芝が工場の再編成等をやっていますけれども、これは影響があるのかどうか、どういった影響が予測されるのか、分析されているのか、教えていただけませんでしょうか。

森山産業集積室長　海外展開についての影響ということでよろしいでしょうか。

衛藤委員　はい。

森山産業集積室長　東芝の関係での海外展開の影響というのは、今のところ、ないと思っております。現在、台湾と貿易を行っているのは、地場の関連企業が主軸となっておりますので、そこの分での影響は出てこないと考えております。

麻生委員　台湾を窓口にして、大陸進出という部分で、特にどういったネットワークを大事にしながらやっておられるんですかね。

森山産業集積室長　いわゆる中国本土への展開ということを考えますと、知的財産の保持等がどうしても気になるということで、やはり、中国との商談を既に台湾の企業さんは多く進めておりますので、そこの人脈を特に活用して、今現在、台湾電子設備協会の中にも、

日本人のスタッフの方がいらっしゃいます。そういった方のネットワークを使いながら、中国への拡大を推し進めていこうと考えております。

工藤工業振興課長　そのほか、三三交流会の日本の経団連に相当する団体でございますので、そういった中国とのネットワークを持たれている団体とのネットワークを活用しながら、また、今回、この商談会で中華整廠発展協会とか、新たなそういう体制を中心とした企業のネットワークですけれども、そういったところとも新たな関係ができましたので、そういったところを活用してまいりたいと思います。

麻生委員　上海にも工場進出したりして、社名を出すとあれですから、Ｋ製鋼の前社長とか、そういったところと台湾の方を結びつけながら、いろんなアドバイスをもらいながらネットワークを太くしていくとか、そういったことも大事でしょうから、ぜひ取り組んでみてください。大阪の摂津の会社、そういったところを含めて、かなり指導してくれると思いますよ。

志村委員長　要望でいいんですか。

麻生委員　はい。

志村委員長　そのほかありますか。

〔「なし」と言う者あり〕

それでは、私から。

来年１月が台湾は総統選挙、大統領選挙で、今のところの情報によりますと政権が変わると思います。そうすると中国に対して、少し様相が変わってくる可能性もあるということも含めて、少しいろいろな関係構築については、注視せんといかんのかと思っております。しかし、台湾と日本については、安定的な関係でありますので、そこは揺るぎないと思いますけれども、そこは少し課題かなというふうに思いますので、ぜひ頭に入れておいていただきたいと思っています。

台湾とは民間交流、経済、あるいは教育、スポーツ、全ての面で大変友好な関係でありますので、これからももう少し掘り下げておつき合いいただければと思っておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

では、以上できょうは終わりたいと思います。

なお、きょうは台湾の領事が来ますので、ぜひお話を聞きにきていただきたいと思います。ありがとうございました。

〔商工労働部退室〕

志村委員長　きょうはこのあと、１２時からもう１回委員会をやりますので、その点、ご了解いただきたいと思っております。その中で協議しようと思ったんですが、５分で終わりますので、２月１８日からの県外の視察について、事務局で説明をちょっとお願いいたします。どうぞ。

〔事務局説明〕

志村委員長　ちょっとハードでありますけれども、台湾の高雄からの大分県への教育旅行に来る高校が決まりましたので、そことの協議をしながら促進をしたいと思っております。

烏山頭ダムの八田與一さん、先ほど言いました中島力男さんの墓標も実は銅像の隣にあるんです。それをぜひごらんいただき、日本の農業の施設の日本時代の大きな遺産を見に行きたいと思います。

それから、亜東関係協会というのは、日本で言う外務省の日本セクションということでいいと思いますけれども、国交がないもんですから、亜東関係協会という組織をつくっております。

最後に国立故宮博物院、新見館長からのご依頼もいただきまして、新見館長の親書を持って、故宮との交流を深めていきたいなと思っております。でき得れば、故宮の博物院のある一品が大分に来るといいな、こういう思いを持ってお訪ねしようと思っております。

以上でございます。何か質問ありますか。

〔「なし」と言う者あり〕

志村委員長　では、体調に気をつけて、ひとつ。

これは公文書を持って、台湾の外交部を通じて先方へ全部当たりますので、もう俺はちょっと行けんとか、俺はこうだということのないように、ぜひお願いしたいと思います。

では、この中の詳細が変わりましたら、私のほうに一任ください。その辺をご了解いただきたいと思います。

よろしゅうございますか。

〔「異議なし」と言う者あり〕

以上であります。

それでは、第３委員会室に移動していただいたあと、終わったら、また、この部屋に戻ってきてください。２０分で終わりますので、よろしくお願いします。

では、以上で暫時休憩いたします。

１０時５２分休憩

１１時００分再開

志村委員長　では、これから特別委員会を再開させていただきます。

きょうの講師は戎処長でありますけれども、日本と中華民国台湾は、正式な国交がありませんけれども、経済や文化や教育、スポーツ、あらゆる面で深い関係にあります。したがって、今、こちらのほうの窓口は、台北駐日経済文化代表処という呼び方でありまして、福岡に福岡弁事処というのがあります。そこの戎処長でございます。どうぞよろしくお願いしたいと思います。

お手元に、宮城県南三陸病院、これが開院できましたのも、実は台湾の方々の３．１１の寄附金でできたと最近報告いたしました。愛知和男先生が大変熱心にお取り組みいただいて、そして、この病院が開院をしていたということも、このような方々の温かいお気持ちをいただいたということの大きなあらわれの１つであります。

そんな深い関係が日本と台湾にはあるわけでありますけれども、きょうはそういうことで、九州と台湾の強固な信頼関係ということでご講演をいただきたいと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

戎台北駐経済文化弁事処長　大分県議会の諸先生方、おはようございます。

今、ご紹介にあずかりました中華民国台湾駐福岡経済文化事務処処長の戎義俊（えびす

よしとし）と申します。うちの事務所の名前は、ちょっと長いですけれども、台北駐福岡経済文化弁事処、本当を言えば、中華民国台湾駐福岡総領事館と考えればいいわけですね。私は総領事に当たるんです。

本日、この大分県議会の行財政改革・グローバル戦略特別委員会に講師としてお招きいただきましたことに対して、心から感謝申し上げたいと思います。非常に光栄に存じております。

きょうのテーマ、九州と台湾の強固な信頼関係の本題に入る前に、諸先生方に、この１、２年の台湾と日本の関係を簡単に説明いたします。

２週間ぐらい前、日本のことしの流行語大賞、２つの言葉が受賞しました。爆買い、トリプルスリー、この２つの言葉を用いて、ここ１、２年の日本と台湾の関係を説明いたします。

昨年、台湾の訪日の観光客、史上初めて韓国を抜いて日本の外国人観光客の１位となりました。トータルの訪日の台湾人の観光客の人数は２９７万人。日本側の日本観光局の統計、ちょっとずれがありますけど、ＪＮＴＯの統計が２８３万人ですね。この台湾の出入国の的確に把握している数字は２９７万人です。

皆さんご承知のとおり、今、台湾の人口２，３００万人ですから、もう既に２９７万人来ていますので、約７人に１人、台湾の人が昨年日本に観光に来ました。この２９７万人の中で、８万８０人が大分県に来ました。

日本の方は、この爆買いという言葉を、多分、中国の観光客が日本に来て、たくさんのものを、化粧品、薬品、家電製品を買い込むと理解されていると思います。日本政府の統計によりますと、昨年１年の外国人観光客、ここで落としたお金は２兆円です。もちろん、中国の観光客もたくさん物を買って帰国なさった。しかしながら、皆さん、中国の観光客だけじゃなくて、台湾の観光客も大変な爆買いをいたしました。

中国の観光客が４泊５日のコースで、１人平均、日本円で２８万円、日本で消費した。台湾は２４万円落とした。外国人観光客の中で消費したお金は、台湾の人も大変爆買いをしました。日本の経済に貢献しました。皆さん、覚えてくださいね、爆買い、台湾の観光客、大変日本で爆買いしました。これが１つ目です。

２つ目が、トリプルスリー。

日本のプロ野球、セリーグ、パリーグ、ことし初めて両リーグでトリプルスリーが誕生しました。セリーグはヤクルトの山田選手、パリーグはホークスの柳田選手。トリプルスリーは、皆さん説明しなくてもわかると思いますね。３割、３０本、３０盗塁。何と台湾も昨年、昨年に限らず、ここ２、３年、日本に対して、トリプルスリーを達成しました。３つの数字をやっていますね。

１つは、４年前、３．１１大震災、台湾からの日本への義援金２５０億円です。しかも、この２５０億円の義援金の９９％は民間から自発的に差し上げた分です。日本政府は余り数字は海外に発表しませんが、世界各国の中で、台湾の東日本大震災への義援金は世界一です。２５０億円、このトリプルスリーの１つ目です。

２つ目は、先ほど申し上げた外国人観光客は、昨年台湾は１位でした。２９７万人。

３点目は、九州全体、大分県も含めて、昨年、福岡県だけで２９万８千人です。これも史上最高の数字なんです。

以上のこの３つの数字ですね、皆さんわかると思います。今、台湾と日本の関係、特に九州と台湾の関係は非常に密接、緊密になってきているんです。諸先生の皆さん方、台湾も爆買いしています。台湾も日本にとって、トリプルスリーを達成しました。

こう考えていただければ、台湾と日本の関係は非常に緊密、密接になっているんです。我々は常日ごろ、台湾は世界一の親日国家だと思っています。皆さん、ぜひこの２つの言葉、爆買い、そしてトリプルスリーですね。見たら、日本と台湾の関係ね、まさに爆買いとトリプルスリー、非常にはっきり物語っていることを覚えていただければありがたいです。

では、本題に入りましょう。

講演の時間、約３０分から３５分ぐらいですね。終わってから、もし皆さん、何かご質問があれば、遠慮なく質問してよろしいと思います。

１台湾は世界一の親日国家。

２０１１年、３・１１大震災の際、日本に送った巨額の義援金の９９％は、民間が自発的に差し上げたものであった。

人的交流は活発、昨年２０１４年、台湾政府観光局が発表した統計によると、２０１４年１月から１２月までに訪日した台湾人観光客は合計２９７万１，８４６人に達し、韓国の２８３万人を抜き、訪日外国人観光客の第１位に立った。

一方、日本から台湾を訪れた観光客は１６３万４，７９０人である。この統計を見ると、台湾の日本に対する観光客差は１３３万人あることがわかりました。

台湾にとって、１３３万人の観光客差、赤字ですね。ぜひ日本側から、もっと台湾のほうに観光客、送客していただきたいと思いますね。

昨年１０月７日から１１月３０日まで、九州国立博物館で、２カ月にわたって開催された故宮展の入場者数は２５万６，０７０人に達し、上出来であった。その催しの成功は各方面に波及効果をもたらしています。

この当時の宣伝ビラ、あと、くまもんの宣伝も翠玉白菜と肉形石、この２つは国宝ですね。

昨年の九州における台湾人宿泊者数は、福岡県は２９万８千人ですね。前年比２２％増です。熊本県は１０万４千人です。前年比２２％増。鹿児島県が１０万３千人、３９％増。大分県は８万８０人、２０％増。長崎県は７万８千人、２２％増。宮崎県は４万１千人で、２６％増。佐賀県は１万５千人、前年比１７％増、山口県は６，２３３人、約１１％増でした。ことしが１月から９月の訪日台湾人観光客の数は２８６万人です。相互往来の人数は、ことし年末まで５００万人に達することは確実です。

皆さん、考えてごらんなさい。台湾と日本の国交はないですよ。国交はないにもかかわらず、５００万人の観光往来、人的往来があるということは、もう実に画期的な出来事で、皆さん、例えば、アメリカ、カナダ、イギリスとこういうような人的往来はございません。

だから、台湾と日本の関係ね、人的往来がいかに密接、緊密にやっているかと、そういうことがわかると思います。

２九州と台湾の強固な信頼関係。

台湾と九州の厚い信頼関係が昨年の九州国立博物館で台北国立故宮博物院特別展開催を実現させた。東京、京都、奈良、九州の国立博物館は、日本国内の４大博物館と言われる

が、東京の開催に次いで、九州国立博物館に決定したことに特別な意義がある。京都じゃなくて、奈良じゃなくて、九州に決定したわけです。それは歴史的な背景があるわけです。

九州は、歴史的にも台湾とのつながりが深い。全１９代台湾総督のうち、７名が九州・山口出身であり、初代の樺山資紀総督は鹿児島出身であり、４代目の児玉源太郎総督は山口県周南市、前の徳山、今の周南市出身であります。１１代目の上山満之進総督は防府市出身です。７代目の明石元二郎総督は福岡出身です。台湾に埋葬されています。

これは樺山資紀、児玉源太郎、これは上山満之進、これは明石元二郎。

初代の台湾宜蘭県県庁、県知事の西郷菊次郎は、鹿児島県奄美大島出身であります。

技師、医師、教師という３つの師をキーワードに、台湾の近代化に貢献した日本人が多かった。インフラ整備にかかわった技師、医療衛生にかかわった医師に加えて、教育にかかわった教師を見落としてはならない。九州出身者がとても多かった。

当時、技師、医師、教師、みんな公務員の身分を持っていました。九州からこの３師の身分で台湾に渡った日本の方々は１万から２万人ぐらいおられました。この人たちは、物すごく大きな貢献をなさったんです。

２０１４年、九州と台湾の貿易総額は６３億米ドルであり、九州経済産業局と九州経済連合会は、九州版日台産業協力架け橋プロジェクトを推進し、ことし２０１５年３月２日から６日まで、大がかりな経済ミッションを台湾へ派遣した。

台北市でビジネス交流会が開催され、九州から１７社、台湾から３２社が参加し、約８０件の商談のうち、食品関連が半分を占めた。

日本から台湾への農水産物、食品の輸出額は８３６億円、香港の１，３４０億円、アメリカの９３２億円に次ぐ３位となっており、輸出品には九州産も多く含まれています。

イチゴ、博多あまおうのほか、大分の日田梨や乾シイタケなど、九州の農産物にとって、台湾は重要な販売先と言えるし、このシイタケですけれども、台湾の人は大分の乾シイタケ、大好きです。台湾人の食生活、食習慣の中で、よくシイタケを使うんです。台湾の観光客が日本に観光に来ましたら、特に大分のシイタケをお土産として持ち帰ったら、親戚、友人に上げたら、すごく喜ばれます。

九州経済連合会は、香港やシンガポールと並び台湾を重視して、平成２４年６月に台湾の最大規模の経済団体である中華民国工商協進会と経済交流の促進を図る覚書を交わしました。

工業やサービス業、文化コンテンツなどを含めた商談会を重ねています。これは当時の写真ですね。松尾先生ですね。

２０１４年、九州を訪れた台湾人観光客は、２１万人、これは史上初めて２０万人を超えました。前年比２５．２％増であったものの、北海道の４６万人、沖縄の４０万人に比べると少し物足りなさを感じました。北海道はいつも４０万人を超えます。ことしも沖縄は４０万人を超えました。九州はまだ入国は２１万人しかないが、もうちょっと九州全体に頑張ってもらいたいですね。たくさん台湾の観光客が来るように、いろんな誘致活動ですか、例えば、台湾の台北のＩＴＦ、国際旅行博、トラベルフェアは非常に有名で、ことしは入場者数は３５万人です。日本国ゾーンもある。日本ゾーンだけで１３６ブースがあって、出展しました。

別府市が３年連続出展いたしまして、今申し上げた８万８０人、そういう結果、効果に

つながったわけですね。

３台湾と日本の貿易経済関係。

台湾と日本の２０１４年の貿易取扱量は、電気機器、化学製品を初め、さまざまな分野において、輸出入ともに上位に位置しており、また、九州経済圏の対台湾貿易輸入額では、前年比２７．５％増加しているんだと、両国はともに重要な貿易相手国として、相互互換関係にあると言えます。

昨今、新興市場の飛躍やＴＰＰの合意など、貿易を取り巻く環境が大きく変化する中で、両国はさらに連携を深めていくことが重要であると考えております。

日台租税協定の締結。

先月、東京で開催された第４０回日台貿易会議において、日台租税協定の締結が行われました。これは日本と台湾が二重課税などを防止し、人の往来や投資を促進するためのものである。

租税協定を結んでいない場合、本来は減免される税金などが発生します。企業個人の負担となります。例えば、現在、日本企業の台湾子会社が配当を日本の親会社に送金する際、金額の２０％を源泉徴収されているが、協定があれば、これが減免される。台湾企業の日本子会社にも同じ仕組みが適用される。事業拡大がしやすくなりました。

また、日本企業の社員が台湾に出張した場合、９１日以上滞在すると、課税対象になって二重課税が生ずる。租税協定があれば、１８０日までなら課税対象と見なされず、長期出張などがしやすくなる。台湾としては、この協定を契機に、将来は日本との実質的な自由貿易協定、ＦＴＡの締結など、包括的な経済連携につなげていきたいと考えております。

４大分県と台湾のつながり。

末永仁、現在の大分県三重総合高等学校卒業、台湾蓬萊米の母と言われています。明治１９年、１８８６年、福岡県大野城市に生まれ、大分県の三重農学校、今の総合高等学校を卒業後、福岡県農事試験場に勤務し、１９１０年２４歳で台湾に渡り、台中の実験農場で台湾の風土に適した米の開発改良に心血を注いだ。１９２４年（大正１２年）、後に蓬萊米の代名詞とも言われる新品種、台中６５号の育種に成功。台湾の農業を大きく変えました。

私は小さいころから、おふくろが炊いてくれた蓬萊米の味、匂い、今現在忘れていません。おいしいです。これを開発した人は末永仁、今の大分県三重総合高等学校卒業者。諸先生の皆さん方の中にこの末永仁のことをご存じでいらっしゃる先生たち、果たしてどのくらいいらっしゃるか。

台中農事試験場内には、台湾蓬萊米の父、磯永吉とともに、胸像が設置されている。日本国内では、福岡県の農業試験場の農業資料館と大分県の大分県立三重総合高等学校の入り口のところに胸像が設置されていますね。

１９３７年からボルネオ島のサラワク王国に招かれ、稲作指導を行うものの、指導に邁進する余り、結核を患い、１９３９年に台湾に戻り、台湾の試験田での作業中に倒れてしまい、療養を続けるも、同年１２月に５３歳でこの世を去った。

大分県の宇佐市生まれの方、中島力男、彼の言葉ですね。「井戸を掘った人の恩義は永遠に忘れない」、宇佐農業学校、現在、宇佐産業科学高校、東京農業大学卒業後、台湾に渡り、台湾製糖への就職を経て、完成前後の台湾の烏山頭ダム、嘉南平野で石川県出身の

技師、八田興一、台湾農業の父のもとで働くことになりました。

ダムの完成により、不毛であったこの地域は、１５万ヘクタールをかんがいすることが可能となり、八田技師から計画給水や計画生産にのっとった農業の指導を任され、大勢の農民への指導を初め、ダムの水を田畑に引くための水路をつくり、完成し、張りめぐらされた水路にどれぐらいの水を放出するかの管理をした。

八田の死後、水利課長となった中島技師の苦労と活躍は終戦間近まで続き、その後も台湾省の留用として１年余り、現地で指導に当たった。

その後は宇佐に帰郷し、中学校で教鞭ををとった。台湾での功績や苦労をほとんど語ることがなかったが、台湾の人たちは、その功績を忘れず、烏山頭ダムのほとりに建てられた八田興一ご夫妻の墓の横に中島技師の生前墓が建てられた。現地の人たちの中島力男への感謝は今も続いています。

１００歳を迎えた年には、嘉南農田水利会の数名が宇佐市を訪れ、感謝状を贈呈、数年前に他界された葬儀のときには、台湾から１００名を超える参列者がいらっしゃった。

大分県の戸次村、今の大分市の高野太吉、１８５７生まれ、獣医師として開業し、日清戦争に獣医師として従軍、１９０１年、大分町に訓盲学校、大分県のいわゆる身体障害者の学校の前身を設立し、初代学長を努め、その後上京し、胃腸病院、仙掌堂を開業し、独自の治療法、抵抗養生法を編み出した。

１９１３年から１６年まで、東京に亡命していた孫文は、持病の胃病が悪化し、仙掌堂を訪れ、かための飯と野菜、新鮮な果物を食べることで胃腸本来の機能を取り戻す独自療法、抵抗養生法により、孫文は治癒、治った。感謝の念を強くした孫文は、医学の一大革命であると称賛した。中国で新たな政治活動を再開した孫文は、高野への恩を忘れず、１９２２年、高野を上海に招き、開業させたほど。

次は、修学旅行について。

大分県は、日本の高校生の台湾への修学旅行の発祥の地だと言われています。台東県と大分県の間では、高校、修学旅行の交流が昔から行われていた。平成２４年から２７年にかけて、台湾と大分県との間で、大学、高校、中学、そして小学校の学生や教職員の交流が今も盛んに行われています。

志村学先生のことをちょっと失礼しますけれども、台湾側は、いつも志村学先生のことをミスター修学旅行と申し上げます。台湾との修学旅行、高校生、１番先に向こうへ修学旅行の学生を送ってくださった。しかも、ずうっと十数年間尽力された志村学先生に感謝し、また敬意を表します。

台湾と大分県に関する最近の動向。

昨年、大分県内の先ほど申し上げました８万８０人ですね。

ことし１０月から台中市と大分県との間、チャーター便就航が始まった。将来的には台中から定期便、直行便の就航が期待されています。今、台中から長崎におりて、長崎から台湾の観光客が大分に来て、大分空港からまた台中空港に帰国する、そういう形に今なっています。だから、間もなく台中から大分の定期便、直行便が就航することと私は思います。

台湾財界のトップである三三企業交流会会長、江丙坤先生が昨年１１月に産業視察のために大分県を訪れた。今後も大分県と台湾のビジネス交流を推し進めていきたいと願って

います。

ことし１１月２７日、台中市と大分県との観光友好交流協力協定が締結されました。つい最近のことね、先月の２７日。

５台湾の日本精神

最後に、日本精神のことにちょっと触れておきたいと思います。

台湾で言われている日本精神とは、すなわち、日本の武士道精神です。

六氏先生、日本による台湾統治が始まった明治２８年、教育こそ最優先すべきと日本全国から優秀な志ある人材６名が集められ、台北士林の芝山巌学堂で台湾の教育に精励した教師たちを指し、翌年、明治２９年１月元旦、この６名の教師と１名の用務員が約１００人の抗日ゲリラにより惨殺されました。

６人の教師の名前、楫取道明、山口県出身です。関口長太郎、愛知県出身です。中島長吉、群馬県出身です。桂金太郎、東京都出身です。井原順之助、山口県出身です。平井数馬、熊本県出身です。

山口県出身の楫取道明は、現在放送中の大河ドラマ、花燃ゆに登場する防府市のゆかりの深い、初代群馬県令の楫取素彦と吉田松陰の妹寿子の次男である。これは独身時代の写真です。

芝山巌精神、危ないことがわかりながらも、死を覚悟して教育に当たった６人の教師の勇気と責任感、その偉大なる教育精神を台湾では芝山巌精神と呼び、６人の教師たちを六氏先生と呼んでいる。

芝山巌は、台湾における教育の聖地とされ、現地の慰霊碑に今でも献花が絶えません。

六氏先生に象徴される戦前の日本人が持つ勇気と責任感こそが、日本精神を究極にしたものであり、日本人が台湾で尊敬された最大の理由である。芝山巌精神は、今でも台湾に生き続けている日本精神なのである。

教育の重要性、夫レ教育ハ建国ノ基礎ニシテ師弟ノ和熟ハ育英ノ大本タリ、これは夏目漱石の言葉。教育は国づくりの根幹である。台湾のことわざに十年樹木、百年樹人、樹木を育てるには十年、人を育てるには百年かかるというものがあり、人材育成の重要性が語られています。

６結論

中華民国台湾と日本両国が共通して持っている日本精神こそが、日台両国の目に見えない強い絆であると言えよう。日本人が、日本精神を失わない限り、日本は世界のリーダーとして発展していくことができると私は信じています。日本の皆さんには、ぜひ日本精神、つまり、大和魂を思い出し、取り戻していただきたい。そして、日本にも、台湾にも、この日本精神が脈々と継承され、そして、お互いにますます輝いてまいりたい。この絆、この言葉、この文字を見てください。糸偏に半分、日本も半分、台湾をもう１つの半分、この２つの半分、真ん中を糸でつながれています。なぜ２５０億円の義援金を贈ったか。そして、なぜ台湾人はあれだけ日本を好き、毎年３００万人ぐらいの観光客が日本に来ているか。台湾の人の１番好きな海外旅行先は日本です。

これは背後の要素、要因は、共通、持ち合わせている日本精神なんです。だから、この日本精神は、目に見えない強い絆です。両国は強く強く結ばれているわけです。

最後、日本精神という絆で結ばれた日台が、これからも切磋琢磨し、一層緊密な友好関

係を築いていけるようにと強く願ってやみません。台湾と九州、山口の間、交流がさらに深まり、関係性が飛躍的に発展することを強く望んでいます。

以上をもちまして、私の話を終わらせていただきたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

志村委員長　ありがとうございました。

５分ほど質疑応答をよろしいですか。

戎台北駐経済文化弁事処長　はい、どうぞ。

志村委員長　せっかくの機会ですから、質疑応答の時間を５分ほど設け、４５分に終わりたいと思っていますが、どなたかいらっしゃいませんか。よろしいですか。

この写真は有名な九份というところですね。

戎台北駐経済文化弁事処長　日本人の観光客が台湾に行く場合、必ずここを訪れる九份です。

志村委員長　この前のＫＡＮＯをちょっと出してください。

戎台北駐経済文化弁事処長　九份という町は、昔、黄金、ゴールドがとれる炭鉱の町ですね。そこに黄金博物館があるんです。日本の観光客は必ずここに行って、黄金博物館、あそこに日本の方が残した足跡がたくさんあります。これは九份の建物です。

今、ＫＡＮＯの映画、先ほどこの中に出てこなかったね。ちょっと紹介しましょうか。

この映画は、昨年、台湾で大ヒットをしました。１９３１年、嘉義農林高等学校の野球部の、今まで弱小なチームだったんですね。甲子園を目指して、他校の嘲笑をよそに予選で快進撃を始める。

松山商業の監督、近藤兵太郎、演じるのは俳優永瀬正敏、彼の特訓があって、守備にたけた日本人、打撃力のある台湾人、そして俊足の台湾の原住民、それぞれの強みを生かして、分け隔てない指導で育てられた彼らは、ついに甲子園の切符を手にした。

映画ＫＡＮＯが台湾で大ヒットした。映画に描かれているのは、日本精神と大和魂であり、組織力、チームワーク、勇気、責任感、諦めない、そして仲間を信じることなど、日本が大事にしてきた価値観である。その価値観は、確かに台湾に伝わっており、日本もそれを絶対に忘れないでほしいと願う。

ＫＡＮＯを通じて、映画監督が日本人に伝えたいのは、台湾というところは、いろいろなエスニック、民族が集まってできている社会であるということ。かつて多くの日本人が台湾に住み、ともに同じ時代を生きていたということである。

日本統治時代の台湾には、よいことも悪いこともたくさんあった。日本人と台湾人の衝突もありました。しかし、歴史的に見ても、我々の提携は見事に成功したのではないか。今、振り返ってみても、それはすばらしいことであり、甲子園を目指した嘉農の球児たちは、その象徴だということである。

当時、準優勝した記念撮影です。

台湾では、映画のエンディングマークが出ると、配役、制作関係者、協力者の名がスクリーンに映っている最中でも、観客はどんどん帰ってしまうのが普通であるが、ＫＡＮＯに限って、終わりと同時に場内から拍手が起こり、テーマソングが終わるまで誰も席を立つことはなかったです。

３民族が協力して、近藤監督のもと、必死のプレーを見せる、特に甲子園に来て、決勝

進出まで３連投、決勝の対商業戦では、右手の人指し指の爪が割れて、血染めのボールを投げ続ける呉明捷投手と、それを励ます監督とチームメートの姿に、台湾の若い層は感動の余り涙を流し、目を拭いながら映画館を出てくるありさまであった。球児たちの不屈の精神に学ぶところがあったのではないだろうか。

このＫＡＮＯは来年の３月１７日、別府市のロータリークラブが千名の人を招待して、映画を放映します。私もそのとき講師として、映画ＫＡＮＯから見た日台の絆というテーマで講演する予定です。皆さん、もしこの映画をまだ見ていないのであれば、３月１７日の別府市内のロータリークラブのＫＡＮＯ映画の上映会をぜひ見てください。すごくいい映画です。

私は４回見ました。４回とも涙を流しました。この涙を誘う感動的なシーンをたくさん見ました。この映画の発音は９９％日本語です。１％、台湾語の発音の字幕が出ています。非常に見やすいです。映画の時間は３時間５分です。ぜひ鑑賞してください。お勧めします。

志村委員長　ありがとうございました。

まだまだいろいろとお話があろうかと思いますが、これだけ日本との関係のことを本当によくご説明いただきました。

お国との関係はとにかく長い、これからも長いと思いますが、我々もやっぱり向こうに出かけていくということが大事だと思っております。出かけていけば、また向こうから来てくれるということでありますので、修学旅行、また再開に向けて、取り組んでいこうというふうに思っております。

もう１度、戎処長に拍手を贈って、終わりにしたいと思います。

ありがとうございました。

それでは、ここで暫時休憩いたします。第４委員会室へ移動をお願いします。

１２時　９分休憩

１２時１１分再開

志村委員長　委員会を再開します。委員会での中間報告なんですけれども、特にいわゆる県有財産のことについては、今年度中にも結論が出るものですから、この第１回定例会に中間報告したいと考えています。

中間報告について、ちょっと事務局から説明をいただきますので、お願いします。

〔事務局説明〕

志村委員長　県有財産のあり方、特に廃校になった高校の跡地の利用ということに絞って中間報告を申し上げたい。その１つは、廃校の県有財産経営室での一元的管理をすること。もう１つは地元自治体の負担軽減の方策の検討、さらに、スピード感を持った取り組みの推進。今年度末が、その時期になっているようでありますが、その辺のことを中間報告に織り込みたいと思っておりますので、その報告書の案は、近日中に皆様方にお届けしますので、できましたら、１月の中ごろ、１５日までに意見をそれぞれお願いしたいなと思っております。

グローバル戦略の台湾へのことについても、また改めて次の機会に協議をしながら、報告の中に入れていきたいと思っておりますが、それでよろしゅうございましょうか。

〔「異議なし」と言う者あり〕

志村委員長　では、そのようにさせていただきたいと思います。

以上でありますけれども、次の委員会はいつごろ、１月の末……。

事務局　中旬から末。

志村委員長　中旬から末ですね。では、来年ですから、手帳を持っていないでしょうから、改めて意見調整をさせていただきますので、よろしくお願いしたいと思っております。

皆さんからほかに何かございますか。よろしいですか。

〔「なし」と言う者あり〕

志村委員長　それでは、以上で本日の会議を終わりたいと思います。２月の視察の件、よろしくどうぞお願いいたします。

では、終わります。